

Ⅲ-7 京扇子における意味のイノベーション

経済学部 現代経済学科 3 回生 岡大志

●京扇子の歴史

- ・京扇子の歴史は古く、平安時代の初期に、当時筆記用具に代えて使用されていた木簡から派生し、京都で作られたのがはじまり。
- ・紙が大変貴重であった当時、様々なことを記録する木簡はその記録用として何枚も綴じ合わせる必要があり、それが最初の扇「桧扇（ひおうぎ）」を生み出した。
- ・天長年間に建立された御影堂（みえいどう）にて、滅亡した平家の玉織姫が寺僧と共に租扇「阿古女扇（あこめおうぎ）」を作ったのが、京都における扇子の発祥とされている。
- ・鎌倉時代頃、庶民の扇子の使用が許可→武家文化の影響で、能・演劇・茶道にも取り入れられ、広く用いられるようになった。

●京扇子の製造工程

- ・胴切り（どうきり） 竹の節を除いて扇子の長さに切る。
- ・割り竹（わりたけ） 鉋（なた）で縦に扇の幅に薄く割る。
- ・せん引き 割竹を必要な厚さまで薄く削（へ）ぐ。
- ・目もみ 薄く割揃えられた扇骨に、要（かなめ）を通す穴をあける。
- ・あてつけ 要の穴に長い串を通して、何千枚もまとめ、板のようにする。その扇骨の・側面をノミと包丁で削り、それぞれの扇骨の形に仕上げていく。
- ・白干し 天日に干して乾燥させる。
- ・磨き 乾燥させた扇骨に磨きをかけ、滑らかにする。
- ・塗り・染め 磨き上げられた扇骨に色を付ける。「染め」は扇骨を釜で茹でて、そこに染料を入れる。「塗り」はハケを使い、扇骨に色を塗っていく。
- ・末削き（すえすき） 仲骨の地紙に差し込む部分を細く、薄く削る。
- ・要（かなめ）打ち 親骨に中骨を挟み、目もみであけられた穴に要を差し込み、とめます。昔はクジラのヒゲを要に用いていましたが、今は金属もしくは樹脂が使われている。「要」は扇子をとめている重要な部分。肝心要の「要」はここからきている。

- ・ 地紙製作合わせ 芯紙（しんがみ）といわれる極めて薄い和紙を中心にして両側に皮紙と呼ばれる和紙を貼り合わせる。後の工程で芯紙が二つに分かれその隙間に扇骨が入ります。また、扇子に用いる紙は地紙と呼ぶ。
- ・ 乾燥 地紙が波打たないように乾燥させる。 裁断 地紙を何枚かにまとめ、扇子の大きさに合わせた扇形に裁断する。
- 絵付け加工色引き 刷毛（はけ）で地紙に色をつける。
 - ・ 箔押し 糊を引いた上に、一枚ずつ金や銀の箔を貼っていく。
 - ・ 上絵 手描き、型刷り、木版、印刷などにより、加飾する。
 - ・ 折加工 折加工 分厚い折りぐせのついた2枚の型紙で、適当な湿り気を与えた地紙をはさみ、手早く均一に折りたたみ、折り目をつける。
 - ・ 中差し 仲骨を差し込むための空間を、差し竹という細い竹を使いあける。
 - ・ 万切り（まんぎり） 折ぐせのついた地紙を折りたたんだまま、万切包丁で天地共に揃えて切る。
 - ・ 仕上げ（ツケ）加工地吹き 中差しであけられた穴に息を吹き込み、仲骨を差し込む為の穴を広げる。
 - ・ 中付け（なかつけ） 仲骨を切りそろえ、糊を塗り、地紙の穴へ差し込んでいく。糊が乾燥しないうちに、仲骨が真中にくるように位置を決める。骨の数が多くなるほど穴は小さくなるので、熟練を要す。
 - ・ こなし 糊によってふくらんだ地紙をたたんだ状態で側面から拍子木でたたく。
 - ・ 万力掛け 厚手の地紙の扇子は、板で地紙部分をはさみ、重しをかける。
 - ・ 矯め（ため） 親骨を火であたため、上の部分がしっかりと閉じるように内側に曲げる。
 - ・ 先つみ 曲げた親骨の先端の余分な部分を刃で切り落とす。
 - ・ 親あて 親骨に糊をつけて地紙と接着し、シメ（セメ）と呼ばれる帯で固定し完成。

●業界の現状

近年、和装・ハンカチ・アパレルメーカー等他産業からの参入や中国などの安い外国製品の増加により、競争が激化している。扇子業界は、かつて夏季に偏る傾向が強くみられたが、若者向け需要の拡大を図るため新製品開発への積極的な

取組によりファッション分野での順調な伸びがみられ、季節偏重傾向が緩和されている。このような現状をふまえ意味のイノベーションとして私は、温風扇子を提案したいと思う。イメージとしては、従来の京扇子に+アルファということでドライヤーの技術を使用したものとなる。

●要素

携帯電話と同様の充電式

電熱線（ニクロム線）に電気を通す事で電気抵抗が起こし、熱を発生させる扇子を閉じ両端の親骨が重なった状態で充電台に接続することで充電可能（温風扇子連続使用時間 2 時間程度）

京扇子のデザイン・基本形の維持（漆塗り・蒔絵など）といった形。

●使用する素材

- ・ 熱に強い紙（ある一定の温度でも紙が変色しない、強度が劣化しない、燃えない等の性能をもつ紙）

- ・ 竹

- ・ 電源（充電式）

- ・ モーター

- ・ ヒーター

- ・ ファン（ファンとはドライヤーや扇風機などの先の回るもの）

となっています。

●技術

- ・ ドライヤーの技術を使用

- ・ 扇子の親骨の部分に電熱線（ニクロム線）を設置し、両端の親骨を厚く作りその中を空洞化し（扇骨は燃えないように覆う）、モーターを設置、その上にファンを取り付け、先端の部分には空気口を作る。

電源(携帯電話等と同様の充電式)

その他

扇子を持つ部分に ON/OFF スイッチ, 安全装置を設置。

ベースは京扇子の作り方と同様。

●温風扇子の使い方

- ・まず温風扇子そのものの充電を行う（コンセント接続）
- ・温風の機能を使用する場合スイッチを ON にし扇子を自分であおぐことで温度調整を行う
- ・その他基本的には従来の扇子の使い方と同様

●温風扇子使用例

- ・従来の扇子と同様、夏の涼としての使用
- ・冬期において使用できる暖房グッズ

●価格帯

価格帯としては、4000～8000円程度（デザイン等によって価格が前後する）

販売方法・販売先

●販売方法

扇子を販売している各店舗・通信販売、家電量販店

- ・販売先

家電量販店、各個人など

●メリット

- ・デザインなどを維持することで京扇子の知名度の向上につながる
- ・家電量販店等の販路の拡大ができる

●デメリット

- ・夏の涼の扇子のイメージを壊してしまう可能性がある
- ・家電量販店などでの商品の管理、保障の問題が発生する恐れがある

●ターゲット

- ・通勤、通学のサラリーマン、学生
- ・一人の時間を過ごしたい人

●狙い

- ・秋、冬など寒い季節に持ち運び可能な暖房グッズとしての確立
- ・従来の京扇子の絵柄やデザインを維持し、京扇子の知名度 UP!!

●課題

- ・重量の軽減
- ・連続使用時間の延長
- ・保障体制の確立が挙げられる。

●感想

この講義では京都にきてからずっと研究したいと思っていた京都の伝統産業に触れることができとても有意義な時間でした。特に良かったことは伝統産業の経営者の方のお話を聞けたことです。他の講演などと違ってご自身の体験談の中に成功したことばかりでなく失敗したこと、日常生活のお話がありとても現実味がありました。また横の繋がりを大切にしていることなど自分のイメージ通りの京都の伝統がそこにありましたし、今後の展望、新しい取り組みについてもお話頂き最後まで興味深いものでした。最後にこうした講演や普段の講義を踏まえて取り組んだ今回の意味のイノベーションの提案は予想していた以上に形にするのが難しいものでしたが守ってきた伝統やイメージとは違うものを作り上げていくことの大変さを一部ながら感じる事ができとても新鮮でしたし勉強になりました。